

## ギレアド・ミシヨリ 6月3日のプログラムについて

ハイドンのピアノソナタ 第32番 ロ短調 は彼のごく少数の短調によるソナタの一つで、もともとはチェンバロのために書かれたものです。

第1楽章は非常にリズムカルで、華やかなファンファーレのような主題と、穏やかで温かい副主題の間で動きます。

第3楽章は意外にもトッカータのようなタッチと精力的な特性があり、フーガのような模倣が主要な役割を演じます。

第2楽章はロ長調のメヌエットで、棘に挟まれたバラのように優しく美しい旋律です。とはいえ、中心の「トリオ」は後ろを見たり前を見たり—— 短調の兄弟たちに意を配っています。

ヤナーチェクの「霧の中で」は、1912年に書かれました。この曲は作曲家の個人の状況を——不安、身もだえ、悲哀を描いています。濃霧、あるいは、もやとの、いわゆる「印象派」的な連想に対する音楽的な照合はほとんどありません。彼の多くのほかのピアノ作品におけるように、子供時代の反映（第1楽章の「伝説」のテーマ、第2楽章の「揺り籠」のテーマ、第3楽章の「童謡」は苦痛と苦悩の動機と並置されています。

ミシヨリの連作曲集「アイネイアースに」は、2013年から2015年にかけて書かれました。ギリシアの英雄アイネイアースについての神話と、カルタゴの女王ディードーとの、悲劇に終わる恋愛事件によって靈感を得たものです。この連作の第1番目の曲「あなた、夜想曲（ノクターン）」はこのホールで3年前にすでに演奏されました！

第4番目「父、接触」は、あの世からのメッセージを聞き取ろうとしつつ、待っている状況にあるアイネイアースを描いています。父親と接触し、父を通じて神々の指令と接触しているかのように、彼は勇気を奮い起し、神々の決定に従い、愛する女を見捨て、自らの宿命へむけて航海の旅を続けることを決意するのです。

「海」（第5番目、連作曲集の終曲）は、しかし、とても友好的というものではありません。この曲は深い低音域での「オスティナート〔執拗反復〕」動機の上に構築されています。この動機はその間中ずっと、わずかながら変化します。この動機は通常は一種の「絶えず変わりやすい」前進する動きを続けますが、それ自体の内なる要素を通して阻止されたり乱されたりします。それは非常に暗い絵であり、最初の第1曲、アイネイアースの音楽物語の始まりへの回想追憶で終わります。

(休憩)

リゲティは「ムジカ・リチェルカータ」を1951年から1953年にかけて書きました。曲中の幾つかは宗教的、祭式的、あるいは儀式的な連想をもっています。どの曲も非常に独特で明瞭な動機か、あるいはトータルな〔フーガの応答が主題と同じ音程で模倣しない〕素材によって明確に特徴づけられています。その意味では、彼はバルトークの「マイクロコスモス〔小世界〕」とかけはなれてはいないのです。また、様式的にはハンガリーの音楽の源と非常に強い関係があり、その扱い方においてもバルトーク流との関連があります。バルトーク「流派」とドビュッシーは並列的で、対照的な立場にあると考えられがちです。それは多くの要素にとっては真実ですが、さらに言えば、これら2人の偉大な作曲家の作品間には多くの「梯」が存在しています。ドビュッシーの作品がリゲティの「ムジカ・リチェルカータ」の間に置かれると、動機の構造や作曲過程、とりわけ、気質に、我々は類似点を発見します。

連作曲集「アイネイアースに」の最後の2曲についての私の答えです。(CD-パンフレットから)

問：父：接触　　彼（アイネイアース）の父ですか。あなた（ミシヨリさん）の父ですか。天にまします我らの父ですか。

答え：三者すべてを一緒にしたものです。トロイから逃げ去る時、アイネイアースは父を両腕に抱えて船に運びます。父は今までにあったもの、前の世代からの遺産、神聖なる義務（神聖なるものはまた我々の族長たちの思考や感情の中に含まれています、、）を象徴しています。同時に、父とは賢明なる支えであり、仲間なのです、たとえ、想像上のものであるにしても。私と文学上の素材との接触において私の父が果たしてくれた役割についてはもうすでに言及してきました。父は優秀なヴァイオリニストで、イスラエルでは有名でした。

父と共演し、録音した最初の曲は、タルティーニのト短調のソナタでした。それを「見捨てられたディードー、、」と命名したのは出版者だというのは本当でしょう。私はその編曲を **Kinnor** と呼ばれるピアノ（ヴァイオリンに対するヘブライ語）のためのソロ曲としてだけでなく、父の思い出に献呈しました。

問： 「父」という曲は信じられないほど優しく愛情がこもっていて、感じられる脈動は時には永劫へと続いていきます。この瞬間の連続中に聴き手を失う不安はありませんか。

答え： 聴き手は束縛され続ける必要はありません。聴き手は音楽と共に自由に動くべきですが、また、音楽から離れることもできます。ただ私が望むことは、聴き手が耳を傾け、没

頭し、この精神の歩みにむけてやって来ているのだという心の用意ができてほしい、ということだけです。この音楽が深みを持っているか否かは、聴き手が感じて自分で判断しなければならないことです。おそらく聴き手は長さや深さに慣れていなければならないでしょう。これは **You Tube** のビデオ・クリップではないのです。ポピュラー音楽の世界はしばしばある意味でどれもこれもあまりにも息の短い、皮相的で、簡単に近づけるものを供します。私は探求に関心があるのです。そして、ついでながら、「接触」は事実、この曲が推移していく間にある確実なものへ至るのです。ある音楽上のモチーフが定着し、それから一種の儀式的開始へと導入します（ここで、フランス語の“**hiératique**”以上にピッタリの言葉は思い浮かびません）それは、別れる決心を具体化し、再び海の荒波の中へ突っ込んでいくことになるのです。

問：第5曲の、深い、きわめてくらい海、、

答え：　そうです。黒と青以外何物もない——そのとき、人は耳を傾けるのです。波のモチーフのオスティナートに似た執拗な反復がいわば、自らにあらがうのです。水中の道は平らにならされてはいませんし、容易なものではありません。それは、{静かな海と順調な航海} ではないのです。私はむしろ、アイネイアースと彼の乗組員たちは三途の川の渡し守カローンの船に乗っているのではないか、と案じるのです。カローンは彼らをこの世をこえて彼岸へと導き入れるのです。